

雲井昭善先生を偲んで

山 本 和 彦

二〇一七年十二月五日、本学名誉教授である雲井昭善先生が逝去された。一〇一歳であった。

一九六三年、大谷大学にインド学講座を開講されたのが雲井先生であった。それまで日本では仏教学研究のなかでインド学は研究されてきた。しかし、雲井先生は一九六一年にウイーン大学に留学されたことを契機に、インド学研究の重要性を痛感されたのであった。インド学講座の初代の主任教授は雲井先生であったが、大谷大学ではすでに山口益先生が龍樹とヒンドウ教ニヤヤー（正理）学派との比較研究などを手がけておられ〔中観佛教論攷〕弘文堂書房、一九四四年、仏教との関わりの中でのインド学研究という姿勢はすでに伝統となっていた。そして、それは現在でも仏教学専攻の大学院生たちによってしっかりと引き継がれている。

雲井先生は、一九二五年大阪府和泉市でお生まれになった。一九二八年に得度受戒され、天台宗の僧侶となられた。一九四一年に大谷大学文学部仏教学科に入学され、卒業後は京都大学文学部哲学科選科に入学され、哲学科印度哲学選科を修了された後、東京大学文学部印度哲学科で学ばれた。一九五五年に大谷大学文学部の専任講師、一九六一年に教授になられ、同年東京大学から文学博士の学位を授与された。一九七五年から一九八一年まで日本学術会議会員、同年に定年退職されるまで、文学部長、大学院研究科長、学長代行など多くの大学の要職に就かれた。定年後は佛教

大学文学部の教授に就任され、さらに天台宗の勸学院院長や天台宗総合研究センター長などを歴任され、二〇一五年には紺綬褒章を受賞されている。

雲井先生は、社会的に偉大過ぎる先生であった。しかし、当時の学生にとってはユーモアがあり、社交的で親しみやすい先生であった。サンスクリットの授業（「バガヴァッド・ギーター」や「サルヴァ・ダルシヤナ・サンクラハ」）の後、大学の隣にあった喫茶店で、コーヒーを飲みながら喫煙し、学生たちと雑談するのを楽しみにしておられた。先生はコーヒーを嗜好され、ヘビースモーカーであった。そのときに頻繁に話題にされていたのは、ウィーン大学留学中の思い出であった。インド学研究の大家であったフラウウルナー先生のもとで学ばれたことが雲井先生の自慢であった。ウィーンでは馴染みのイタリア料理店によく通われていて、ドイツ語圏への留学にもかかわらず、イタリア語を話せるようになったと話されていた。

雲井先生のご専門はパリー語と漢文資料による原始仏教研究とヒンドゥー教ヨーガ学派の研究であり、この二つが大きな柱であった。先生の代表的なご研究を一つだけ挙げるとすれば、平楽寺書店から一九六七年に出版された『仏教興起時代の思想研究』であろう。第三章「仏教興起時代の諸思想」において、『沙門果経』に基づいて六師外道と六十二見の思想とそれらに対する仏教からの批判が研究されている。これを踏まえて、第五章「宗教とその本質―バラモン宗教と仏教の論点―」において、バラモン宗教、自由思想家と仏教との比較研究がなされている。ブツダはバラモンによる祭祀の宗教、六師外道の三師パクダ・カッチャーヤナ、マツカリ・ゴーサラ、ニガンタ・ナータブツダの宿命論、六師外道の二師アジタ・ケーサカンバリン、プーラナ・カッサパの無因論、バラモン系沙門の有神論を批判する。その批判の根拠はブツダの縁起思想であった。縁起の考えによれば宿命、無因、神を想定する必要はない。ヴェーダ、ウパニシャッド文献やパリー語、漢文仏典を自由自在に涉獵することは雲井先生の得意とされるところであった。

二〇〇八年、九三歳のときに九八四頁にもなる『パーリ語佛教辞典』を出版されたときには、いつまで勉強されているのかと驚かされた。

二〇一三年には雲井先生からのご寄付を財源とする雲井奨学金が本学で創設された。これは経済的事情により修学が困難な学生に対して給付される奨学金であり、現在でも多くの学生が恩恵を受けている。雲井先生は明るい性格であつたが、幼少期にはいろいろと苦勞されたご様子であつた。そのことがこの奨学金の創設につながっているのかもしれない。毎年十月に奨学金の授与式に本学に來られていたのであるが、昨年は体調不良で欠席されていた。

ゼミ生とともにインド旅行されたことも、その後の本学でのインド研修の授業につながっているかもしれない。研究者として活躍している門下生は日本中にいまもたくさんいる。雲井先生はたくさん種を撒かれた。それらが発芽し、成長しているのである。